



陳氏一族の栄華と革命の歴史を刻む 広東民間工芸博物館(陳家祠・陳氏書院)

かわぐち ゆきひろ
川口 幸大 東北大学准教授



陳氏書院の外観

広州にある広東民間工芸博物館は、じつにユニークな博物館だ。まず、名前からして、「広東民間工芸博物館」とよばれることはめつたになく、みなたいてい「陳家祠」あるいは「陳氏書院」とよぶ。「祠」とは祖先を祀る施設のこと、「書院」とは子弟への教育をおこなう民間の施設のこと。では陳氏の祖先祭祀かつ子弟教育のための建物がいかにして民間工芸博物館になったのか。それを知るには、一九世紀終りの清代末期にまでさかのぼり、この建物の歴史をひもとかねばならない。

陳氏一族の書院から工芸博物館へ

一八八〇年、広東省各地の陳姓の人がとお金を出し合って、書院を建てた。陳氏の書院、すなわち「陳氏書院」である。書院を利用できるのは建設の際に出資した一族の者たちだけであり、そこに出入りできること、祖先の位牌を安置できることは、たいへんな名誉であった。当時、陳氏に限らず広東各地の一族はこぞつてこうした施設を建て、広州市内においてその数は三〇あまりにのぼっていた。

ときは流れ、一九四九年に新中国を建国した共産党は、このような一族の紐帯意識や祖先崇拜などを「封建迷信」として激しく排撃した。とりわけ文化大革命期には、陳氏書院は印刷工場として使用さ

れただけでなく、壁や柱に施されていた美しい彫刻ははぎ取られ、五〇〇〇あまりあった祖先の位牌もほぼすべて燃やされてしまった。

その後一九七〇年代の末に共産党政府が階級闘争を収束させ、「改革開放」路線へと国策を転換すると、まもなくして陳氏書院の修築が始められて、一九八三年には一般に公開されるようになった。

一族の栄華と現代中国の歴史に 思いをはせる

こんにち陳氏書院のなかには、刺繍や象牙彫刻など広東の芸術・工芸品が展示されており、「工芸博物館」の面目躍如といったところだ。しかしなんととっても見どころは、かつて陳氏一族のステイタスシンボルであった書院の重厚で静謐なたたずまい、修復された柱や壁の精巧な彫刻、そして建物の一奥の祭壇に置かれたふたつの位牌であろう。五〇〇〇あまりの位牌のうち、わずかにこのふたつだけは、職員が秘密裏に保管して文革の難を逃れたのである。祭壇の前に立つてこの位牌を眺めると、清代末期の陳氏の栄華と、共産党による革命の騒擾たる歴史に思いをはせずにはおられない。



壁に施された精巧な彫刻



祭壇に置かれたふたつの位牌